

第1章 リミタリアニズムの哲学入門

著者: Ingrid Robeyns

1. リミタリアニズムの基本的直観

私たちは皆、なぜ貧困と闘わなければならないのかについて、多くの理由を知っている。貧困層は基本的ニーズを満たすだけの金銭を持たず、社会から排除され、適切な敬意を払われず、他者から支配されやすい餌食となる。物質的・非物質的財の領域において、誰かが「欠乏している」とはどういうことか——つまり、所得、富、権力、権威、水、食料、住居、エネルギーといった重要な財を十分に持たないことが何を意味するか——については、広く理解が共有されている。政治的立場に関係なく、事実上すべての人が、すべての人は重要なものへの十分なアクセスを持つべきだという点で合意している。

もし「可能な限り貧困を回避すべきだ」という主張がなされるとき、それはしばしば道徳的主張として——貧困が悪い、あるいは間違っているという示唆を伴って——提示される(一部の非利他的な人々は、例えば物理的安全と安定だけを気にかけ、貧困根絶によって熊手を突きつけられる事態を避けられると期待するという理由で、道具的主張としてのみこれを支持するかもしれない)。私たちはこれを政治的主張にすることもできる。すなわち、私たちの社会制度は、実行可能な範囲で(そして、貧困回避が他の重要な価値のより大きな損失をもたらさない範囲で、と付け加える者もいるかもしれない)、貧困を回避するよう設計されるべきだと言うことによって。

2. 「持ちすぎ」という問題

しかし、私たちは誰かが「持ちすぎている」状況があるとも言えるだろうか? そして、誰かが持ちすぎていることを懸念する理由は何か? これらがリミタリアン・プロジェクトの中心的問いである。

これは単に政治哲学者にとって関連する問いではない。社会全体において、一部の人々が取りすぎ、受け取りすぎ、あるいは獲得しすぎていると市民や論者が主張する事例は数多く存在する。最も裕福な億万長者たちの財産は想像を絶するほど巨大になり、ジャーナリスト、活動家、芸術家たちは、それを理解可能にするための視覚化方法を考案しようと試みている。例えば、Forbes世界億万長者リスト2022は、個人の最大資産が2,510億ドル——つまり251,000,000,000ドル——であり、2022年のある時点でイーロン・マスクが所有していたと推定している。これを例えば4万ドル——テスラ(マスクの最大企業)の生産労働者の平均賃金——と比較してみてほしい。

しかし、それよりはるかに裕福でない人々の金融資産に対する道徳的・政治的憤慨もある。例えば、年間数百万ユーロを稼ぐヨーロッパのCEOたち——2018年の金融危機で救済されなければならなかった銀行の取締役や、人間にとって地球を居住可能に保つために切実に必要な脱炭素化を遅らせていると批判される化石燃料企業シェルなどが含まれる。しかし、一部の億万長者たちは「愛国的億万長者(Patriotic Millionaires)」のようなグループを組織し、超富裕層により多くの税金を支払わせることで経済的不平等を減少させることを目指す政治的行動主義に従事している。

リミタリアニズムは、ある時点で、人は十分に稼ぐか蓄積するかすれば、「持ちすぎている」と主張する。この見解によれば、希少で価値のある財や資源について、ある一定の上限以上を誰も持つべきではない。最も広く検討されているこれらの財は金銭——所得または富の形態——である。しかしリミタリアニズムは、生態系が人間に提供するサービスや、大気の温室効果ガス吸収能力といった、他の価値ある希少財にも適用可能である。

本書は、既に発表された論文と新しい研究を提示することによって、リミタリアニズムに関する最先端の哲学的議論を集めている。「持ちすぎる」ことがあり得るという考えは、新自由主義的価値観で育てられた現代資本主義社会の人々には奇妙に聞こえるかもしれないが、過去の多くの思想家によって主張されてきた。

2000年以上前、プラトンは『法律』の中で、理想的なポリスには極貧も大いなる豊かさも存在しないだろうと論じた。なぜなら、これらのいずれかが存在すれば、都市は内戦に見舞われるからである。したがって彼は、所有は貧困限界の最大4倍を超えてはならないと提案した(プラトン 2016, 744e)。Matthias Krammと私が西洋政治哲学の鳥瞰図で示したように、富の獲得・所有または消費に上限を設けるべきだと主張してきた様々な伝統の思想家たちが存在してきた(後者は一般的に前者を前提とするが、含意はしない)。

それでも、現代西洋政治哲学における議論は、過去の議論とは異なる形態をとることが多い。特に、過去の議論はしばしば徳倫理学と、倫理的なものと政治的なものの同一視に依拠していたが、現代の議論は一般的に、公共領域外でなされた人格や個人的選択に関する道徳的判断を避けようとする政治哲学の形態に基づいている。

私は2012年に開発を始め、最終的に2017年のアメリカ政治法哲学会のNOMOS年報に発表した論文で「リミタリアニズム」という用語を造った(Knight and Schwartzberg 2017)。その論文は本書第2章として再録されている。他の研究者たちも類似のアイデアに取り組んでいた。最も印象的なのは、Christian Neuhäuser(2018)が、お互いの研究を知らないまま、富の集中の道徳的問題に関する全書を(ドイツ語で)出版したことである。

過去5年間で、このトピックに関する小さいながらも急成長する文献が出現してきた。私は特に幸運にも欧州研究評議会からConsolidator Grantを授与され、それによって政治理論家と哲学者からなるより大きなチームが、生態的・経済的資源の専有における限界の問題に取り組むことができた。この小さな文献領域の発展は、リミタリアニズムに関する学術的議論に特化したいくつかのワークショップと会議によっても支援された。本書は、これらの主要な公表論文と、いくつかの新しい議論を集めることを目指している。そして、この書籍が英語版とスペイン語翻訳版の両方で出版されるため、二つの大きな学術言語共同体の学生と研究者にとって、これらのテキストがより容易にアクセス可能になるだろう。

2. 本書の目的

本書には三つの核心的目的がある。

第一は、リミタリアニズムに関する最先端の議論を提供することである——急速に進化する文献が存在する場合、これが可能な範囲で。以前に論文として発表されたすべての章がオープンアクセスで出版されたわけではないため、本書の目的の一つは、リミタリアニズムに関するより多くの論文をすべての人にアクセス可能にすることである。本書はFair Limitsプロジェクトの最終的な集合出版物としても機能するため、再録論文の選択は、そのプロジェクトの枠組み内で出版された論文に焦点を当てている。

第2章は、リミタリアニズムが導入された「Having Too Much」という章の再録である(Robeyns 2017)。**第3章**は、Kramm and Robeyns(2020)の再録であり、西洋哲学史におけるリミタリアニズムの「前身」と見なせるものの簡潔な概観を提供している。明らかに、この概観は完全ではない——様々な非西洋哲学の歴史を除外しているだけでなく、他の理由もある。例えば、Eric Schliesserは、スピノザが17世紀に書いた理想的君主制の説明において、限定的形態のリミタリアニズムを支持していると読むべきだと論じている(Schliesser 2021)。Schliesser(2022)が発見したもう一つの例は、L.T. Hobhouseであり、彼は1911年の著書『自由主義』で明示的なリミタリアン主張を行った。このトピ

ックの議論が増えれば、リミタリアン主張を行った歴史的思想家がさらに発見されることが期待できる。

第4章は、Danielle Zwarthoedの論文「Autonomy-based Reasons for Limitarianism(自律性に基づくリミタリアニズムの理由)」の再録であり、人間の道徳的自律性を保護するために、社会は人がどれほど裕福になれるかに制限を設ける必要があると論じている(Zwarthoed 2019)。

第5章は、Dick Timmerの論文「Limitarianism: Pattern, Principle or Presumption(リミタリアニズム:パターン、原理、それとも推定か)」の再録であり、彼はリミタリアニズムが正確にどのような種類の原理であるか(あり得るか)を分析し、中間レベルの原理として、また推定的根拠に基づいてリミタリアニズムを擁護している(Timmer 2021b)。

第6章と第7章は、最近Journal of Political Philosophyに発表された2論文シンポジウムの再録である。そこでRobert Huseby(2022)は、リミタリアニズムは充足主義または平等主義のいずれかに還元できるため余剰であると論じた。第2論文(Robeyns 2022)で、私はこれらの異議に応答し、リミタリアニズムの考えをさらに明確化した(本序論のセクション3も参照)。私はまた、充足主義の文脈でLiam Shields(2020)が最近明示的に擁護し、John Roemer(2004)の以前の議論に基づく主張——私たちは分配的正義のハイブリッドまたは多原理的説明に向かうべきだという主張——を支持した。これは実際、ロールズ自身の正義論でもあった(Rawls 1971)。社会的または分配的正義の完全な説明において充足主義的閾値とリミタリアンの閾値を組み合わせる理由は、本書のColin Hickeyの新しい論文(第9章)でさらに展開されている。

彼の論文で、Husebyはまた、Timmerが提唱した(本書第5章に再録)リミタリアニズムの推定的議論も批判している。本書の**第8章**「Presumptive Limitarianism: A Reply to Robert Huseby(推定的リミタリアニズム:Robert Husebyへの応答)」で、Dick TimmerはHusebyの批判に応答し、推定的リミタリアニズムの擁護を部分的に修正し、さらに明確化している。

本書の第二の目的は、この議論において新しい論証を前進させることである。**第9章**「Sufficiency, Limits, and Multi-Threshold Views(充足、限界、多閾値観)」で、Colin Hickeyは、充足主義者がリミタリアニズムも支持し、リミタリアンが充足主義を支持する十分な理由があると論じている。彼はまた、両者の間の必要な概念的つながりについて投機的考察を提供している。彼は、分配的正義の最も妥当な説明のほとんどが、少なくとも一つの充足主義的閾値と一つのリミタリアンの閾値を含む多閾値観であることに驚くべきではない理由を説明することで章を閉じている。

第10章「A Neo-republican Argument for Limitarianism(リミタリアニズムのための新共和主義的論証)」で、Elena Icardiは、新共和主義者がリミタリアニズムを支持すべきか、そうであればどの形態を支持すべきかを分析している。彼女は、非支配としての自由は市民が政治的影響力の平等な機会を持つことに基礎づけられており、この平等は超富裕層がより大きな機会を享受するという事実と、形式的制度的制約がそれを最小限にしか防止できないという事実の両方によって危険にさらされるため、新共和主義はリミタリアンの閾値を支持すべきだと論じている。しかしAdelin Costin Dumitru(2020)とは異なり、Icardiは、そのような閾値は、富裕層が完全に繁栄するために必要とするよりも多くの資源を所有する場所ではなく、富によって民主主義を支配する場所で課されるべきだと主張している。

第11章で、Christian Neuhäuserは、基本的善としての自尊心(self-respect)の概念に基づく、リミタリアニズムのための新しい理由を提供している。彼は、社会のすべてのメンバーの自尊心を保護し、彼らが自己価値感を発展させ、善き生の自分自身の考えとそれが伴うプロジェクトを追求する自由を享受できるようにするために、リミタリアニズムが必要だと論じている。これは、Neuhäuserが論じるには、ロールズの正義論がリミタリアニズムを支持すべきであることを含意する——差異原理を上限閾値を含む方法で解釈するか、あるいは追加の原理としてそれを加えることによって。

本書の第三の目的は、富への上限と生態的資源の使用への上限の哲学的分析を近づけることである。リミタリアニズムは富の問題だけに制限される必要はなく、生態的資源の使用に関する問題との関連でも考察できる。

第12章は、Colin Hickey(2021)の論文「Climate Change, Distributive Justice and 'Pre-institutional' Limits on Resources Appropriation(気候変動、分配的正義、資源専有への「制度以前の」限界)」の再録であり、大気の吸収能力の使用に対する制度以前の限界は、いくつかの倫理理論に基づいて正当化できると論じている。

第13章は、Fergus Greenの論文の再録であり、非理想的で制度的な設定における生態的資源の領域での限界の問題を検討している(Green 2021)。

最後に、**第14章**で、Tim Meijersは将来世代に目を向け、二つの問いを問う。第一に、現在の富への限界として理解される経済的リミタリアニズムを支持する世代間正義に関連する理由を私たちは持つか? 彼は、私たちが将来世代に正しい制度を負っているならば、私たちは富の固定化を防ぎ、将来の不平等を防ぐ理由を持つと論じている。第二に、経済的リミタリアニズムを超えて生態的限界も見るとすれば、将来世代への懸念を出発点とするリミタリアンの見解はどのようなものになるか?

3. 文献における重要な展開

あるアイデアが提示され擁護されるとき、そのアイデア自体の概念化や見解への可能な理由が、さらなる議論や批判に応答して変化するのは驚くべきことではない。Huseby(2022)への私の応答で、私はすでにそのような変化のいくつかを指摘したが、ここでは特に一つの重要な変化を強調し、それを動機づける背景を説明したい。

2012年にリミタリアニズムについて書き始めたとき、私は最初、二つの問いに動機づけられていた。第一に、貧困線の逆、つまり、最大限に繁栄する生のために必要とするよりも多くの物質的資源を持つ量を表す線を、もっともらしく引くことができるか? 第二に、その線以上の金銭は他者に再分配されるべき、あるいは、解決されれば悪化している人々の繁栄を改善する問題に対処するために使われるべきだという主張の理由は何か?

これらの問いへの答えは、私が提供した「富裕の説明(account of riches)」(Robeyns 2017: 14-30)と「満たされない緊急ニーズからの議論(argument from unmet urgent needs)」(Robeyns 2017: 10-14)の形で現れた。富裕の説明とそれへの反論は実際にこの論文の大部分を占め、最初に開発された。2013年後半から2014年初めにかけて論文をさらに発展させたとき、私は(疑いなく対話者との議論を通じて)政治的平等への脅威が過度の富の集中に反対する少なくとも同等に重要な理由かもしれないことに気づき、したがって民主主義的議論をリミタリアニズムの第二の議論として追加した。

しかし、当時私は、富裕線——人が完全に繁栄しており、(政治的で純粋に唯物論的な繁栄の説明を使えば)繁栄を改善するためにより多くの金銭を使えないレベル——が、政治的平等の価値を保護するのに十分な適切な上限でもあるかどうかを問わなかった。Fair Limitsチーム内の議論と2019年1月のユトレヒトのワークショップ参加者間の議論によって、リミタリアニズムが保護しようとする異なる根底にある価値が異なるリミタリアンの閾値を要求する可能性があり、それらの閾値のいくつかは絶対的ではなく相対的であるべきだということが明らかになった。

私はまだ、富裕の正しい概念化(つまり、貧困の対称的反対を意味する概念)は絶対的閾値であり、もっともらしく「富裕線」と呼べると考えているが、富裕線は複数のあり得るリミタリアンの閾値の一つに過ぎないことに同意する。同様に、富裕な人が持つ富裕線以上の金銭は依然として「余剰金」または「余剰富」(つまり、上述の特定の意味で繁栄するために使えない金銭)と呼べるが、リミタリア

的閾値以上の金銭のより一般的な用語は「過剰富」または「過剰金」である(Robeyns 2022: 253-254)。

文献におけるもう一つの展開は、リミタリアニズムには広範囲の理由があることが現在明らかになっていることである。最初の二つの理由は、満たされない緊急ニーズからの議論(これは本質的にPeter Singer(1972)のような学者によって提案された功利主義的議論の修正である)と、民主主義的議論(これは平等な政治的影響力として理解される政治的平等を保護することを目指す)であった。

Daniel Zwarthoed(2019)は道徳的自律性に基づく議論を追加し、Christian Neuhäuser(2018)は人間の尊厳に基づく議論を追加し、Neuhäuser(2018)とRobeyns(2019)はリミタリアニズムの生態学的理由を追加し、Dumitru(2020)とIcardi(本書)は共和主義的自由に基づく議論を発展させた。さらに、複数の理論家がリミタリアニズムは絶対的閾値ではなく相対的閾値を用いるべきだと論じた。

4. 今後の方向性

本書の論文はすでに今後の研究のための多くの問いを提起している。しかし、様々な学者たちが長年にわたってこのトピックに取り組む中で提起された追加の問いがある。

第一に、哲学者にとって、リミタリアニズムが制度的含意のない単なる道徳的見解なのか(したがって政治的見解ではないのか)、それとも政治的見解なのか、あるいは両者の組み合わせなのかを知ることが極めて重要である。組み合わせであるならば、そのような組み合わせは正確にどのようなものになるか?

第二に、リミタリアニズム的閾値が絶対的であるべきか相対的であるべきかについて、文献では様々な議論が提供されてきた。リミタリアニズムが導入された論文で、私は絶対的閾値を擁護したが、前節で説明したように、これは富裕線を発展させるという私のプロジェクトによって動機づけられていた。これは、私の見解では、満たされない緊急ニーズの議論のための適切なリミタリアニズム的閾値である。しかし、複数の哲学者が、政治的領域における物質的支配を避けることに焦点を当てる民主主義的議論は相対的閾値を必要とすると正しく論じてきた。

第三に、リミタリアニズムがどのような種類の原理であるか、あるいはあるべきかについての問いがある。分配的正義のパターニングされた原理か、あるいは基礎的原理から導出された派生的原理か?

第四に、リミタリアニズムは自由主義的政治哲学とどのように関係するか? 一部の批評家は、リミタリアニズムは私的所有権への過度の侵害を伴うため自由主義と両立しないと主張してきた。

第五に、リミタリアニズムは実践においてどのように実装されるべきか? 税制政策、所有権法、その他の制度設計を通じてか?

これらの問いは多様であり、重要な研究アジェンダを生み出す。本書の論文はこれらの問いのいくつかに取り組んでいるが、多くは今後の研究に残されている。

結論

リミタリアニズムは急速に発展している研究分野である。本書は、この重要な哲学的議論の現状を捉え、新しい論証を提供し、富への上限と生態的資源への限界の問題を統合することを目指している。リミタリアニズムは、現代社会が直面する不平等、民主主義の脆弱性、気候危機という課題に対処するための重要な概念的ツールを提供する。

本書が、学生、研究者、政策立案者、そして「持ちすぎる」ことが道徳的・政治的問題であると考え、すべての人々にとって、価値ある資源となることを願っている。

参考文献

(原文に記載された参考文献リストを含む)

© 2023 Ingrid Robeyns, CC BY-NC-ND 4.0

<https://doi.org/10.11647/OBP.0338.01>